

草津市立矢倉小学校通信 令和3年5月17日 NO.3



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

宿題のとりくみ方、見守り方

子どもの頃の私にとって、やっかいなことは、ただ一つ、毎日の宿題だった。大人には宿題がなくて、うらやましいなあと何度思ったことか。日記や作文は、時間さえあれば、なんとか書きあげるのだが、その分、おもしろくもなんともなく、ますますいやな宿題となっていた。算数の問題には、かなり苦しんだ。が、何かの拍子に、ピクとも動かなかった扉がいつも簡単に開いて、向こうの世界に入っていける爽快感もおもしろかった。算数の問題に苦しむ私に、兄はよくつき合ってくれた。だから、一通り宿題を終えれば、大きな仕事をやりとげたような達成感に包まれ、それだけが救いだった。兄の口癖は、「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥」だった。逆に、父からは、「わからなかったら調べなさい、できなかったらできるまでやりなさい、何もしていないうちから、あかんとあきらめるほど、つまらんものはない。」とか「もともと、人間は何一つできない赤ん坊で生まれてきて、しくじりながらみんなのお世話でできるようにお育てをいただき、一人前になっていくもんだ。」などと安易に誰かに頼ることを戒め、お世話してもらっていることを感謝するよう求めた。

逆上がりは、宿題ではなかったものの、自分でもよくやっただとほめてやりたくなる思い出だ。どちらかといえばどんくさい私は、夕方、学校の運動場に誰もいなくなったことを確かめるようにして、鉄棒のところを通った。できない姿を見られたくなかったからである。自分は腕に力がないからだろうとできるだけ長くぶらさがってみたり、腹筋をつかって脚を跳ね上げる練習を試してみたりと工夫した。血豆をいくつもつくって、やっとできるようになったときのうれしかったこと。その日の晩ごはん、もちろん報告した。家族はみんなよくがんばったと喜んでくれた。

夏休み、チョウをテーマに自由研究をしようと私は網を持ってアゲハチョウを追い回すことがあった。そんな私を見て、「どんくさいおまえのような人間につかまるチョウなどおらんぞ。」と父に笑われたときは、悔しさ以上に腹立たしくなった。自分で工夫してやるよう、ことあるごとに言っていたのに、人のことをバカにして笑うとはどういうことか…と。そんな父の言葉も、今では、虫取りをし始めた私の本気度をみようとされたものと了解してはいるのだが。

いつもいつも、「そうだそうだ、すばらしい、その調子」と、それほどでもないのに、おだてるばかりでは確かによくない。ほんとうにできるようになっていて、自信もついているかといったことは、失敗しながらわかっていくものだ。だから、時には、「それで大丈夫か、どれほど本気でとりかかっているのか」「まだまだ、ここができてないぞ」と指摘されることが必要となる。確かな目をもつ人、本人が信頼し、決して見放さない人からの厳しい言葉であればなおさらだ。

もちろん、宿題をしているそのそばで「書き順がまちがっている。」「字がゆがんでいるから、書きなおし!」「消しゴムで消すなら、もっときれいにしなさい。」あげくのはてに、「姿勢が悪い! 背すじを伸ばして!!」などと、言い続けると、やる気は半減どころか、あとかたもなく消え去ってしまう。大事な相手であればあるほど、あれこれ言いたくもなり、放っておけない衝動に駆られるのはよくわかる。が、そうすることがどのような結果になるかということを知りたければなるまい。ほどよい距離を置きながら、見守り、気にかけて、励ますこと。時に、厳しい忠告も。親しい関係だからこそできる支え方がある。けっして見放さないゆるぎなさの上に、努力の果実は実っていくものではないだろうか。

校長 大林道範